

評価や、染色体異常などの生物影響について紹介された。測定された空間線量率から、何らかの影響が懸念されるレベルの被ばくを受けた可能性があること、またそれらを明らかにするための継続的な影響調査や野生生物の正確な被ばく線量評価の重要性について提言された。

最後に、急遽日本の研究者との連携を推進するために来日した、フランス放射線防護原子力安全研究所 (IRSN) の J.C. Gariel 氏により福島第一原発事故後の IRSN の対応が紹介され、今後重点的に研究が推進されるべきトピックとして、生態系への放射性物質の流入、長期的な動植物への影響調査、原発周辺の海水の再生評価などが挙げられた。

以上の話題提供の後、短い時間ではあったものの、会場の参加者を交えて討論が行われ、土壌調査について研究者間で Bq/kg と Bq/m^2 が混在している状況の改善など、現地での経験に基づいた活発な意見交換がなされた。今回の発表会では福島第一原発事故関連のセッションが多数組まれていたこともあり、参加者の関心も非常に高く、立ち見での参加となった方も多かった。参加していただいた皆さまに感謝して本稿を終わりたい。

(筑波大学アイソトープ総合センター)

パネル討論 2

原子力災害を踏まえた放射線教育 及びコミュニケーション

田中 隆一
Tanaka Ryuichi

東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故がもたらした放射能災害及び風評被害を受けて、放射線に関わる教育及びコミュニケーションに対する国民的な関心が高まり、その社会的意義がこれまでになく重視されている。しかし、放射線に対する恐怖・嫌悪感が社会全般にわたって深刻化すると同時に、そのリスク認知が多様化して、放射線の影響・防護に関わる認識が混

乱し、その共有が難しくなっている。この状況下で放射線についての学校教育や国民理解はいかにあるべきかをパネル討論のテーマとして取り上げ、5名のパネリストに専門の立場から講演をしていただいた。

放射線影響の専門家の視点から、放射線医学総合研究所の酒井一夫氏は、事故に関連する放射線影響の国民の受けとめに着目して、これまで体験したことのない事態の中で不安を煽る情報によって、人びとの放射線影響に関する認識に大きな混乱を引き起こしているが、専門家は専門用語の説明を含めてきちんとした理解を得るような情報提供を心掛けるべきであることなどを強調した。

放射線防護の専門家の視点から、NPO 法人放射線安全フォーラムの加藤和明氏は、「原子力災害に関連する放射線防護の喫緊課題」として、安全神話だけでなく危険神話の呪縛からも解かれた放射線安全に係る新しい制度設計を、用語の概念や品質管理の規定、安全管理システムの運用、システムの性能監視等を含めて、我が国が世界に先駆けて速やかに構築するべきであると提言した。

事故を踏まえた学校での放射線教育については、放射線の専門家の視点から、NPO 法人放射線教育フォーラムの田中隆一(筆者)は、学校教育における放射線に関わる学習指導の特殊な歴史的事情を背景に、文部科学省が事故後に公表した副読本を含めて、断片的な社会科学習に偏る現状の放射線学習を改めて、理科的、科学技術的な学習基盤を構築する必要性を説いた。引き続いて、教師の視点から、練馬区立開進第一中学校の高島勇二氏は、風評被害の影響で正しい放射線情報が伝わらない状況の下であっても、少なからずの中学生が、放射線に対してマイナスイメージだけを抱いているわけではなく、様々な情報を科学的に受け止め、放射線の性質や影響とともに、除染、放射線実験等の実証的な学習を望んでいるという状況に着目し、基本的な放射線学習の徹底した継続と地域や保護者を巻き込んだ教育の重要性を強調した。

社会的なコミュニケーションの視点からは、

ウイメンズ・エナジー・ネットワーク (WEN) の浅田浄江氏が、専門家と一般の人々を結ぶ分かりやすい情報のパイプ役としての立場から、今回の事故がもたらした放射線に関わる情報の洪水にのまれずに、何をどのように伝えるべきかを、これまでの地道な WEN の活動実績を踏まえて事故後も適切な情報提供を実践してきた成果を報告した。

参加者 (一般参加も含む) との 40 分にわたる討論では、放射線による健康影響や防護に関わる様々な情報の伝達や理解に関わる問題から日常生活に根差した放射線利用に関わる教育まで、幅広い内容が話題となったが、事故から 16 か月経って、過剰な反応は一時期より少し落ち着く方向にあって、徐々に冷静な議論がしやすくなりつつあることが感じられた。しかし、この事故で顕著に表れたマスメディアやイ

ンターネットが流す情報による錯綜・混乱を考えると、現状の教育システムではカバーしきれない科学技術情報を橋渡し、あるいは仲介するインタープリターを積極的に位置付けていく仕組みの必要性が、関連する質疑から共通して感じられた。

学校現場での放射線教育においては、原子力エネルギー学習の前に、宇宙や地球の環境の成り立ちの自然学習の中で自然放射線やオーロラ の存在を学ばせる指導が必要ではないかという意見があった。放射線利用学習の中で放射線とは何かという基礎的なことを理解させる指導案とともに、今回の事故を踏まえた放射線教育の在り方を考えていく上で、貴重な提案ではないかと考える。

(NPO 法人放射線教育フォーラム)